

一方、小学校の英語教育を導入することよりも前にすべきことがあると主張する人がいる。国際教養教育を教育理念として掲げグローバルな場面でリーダーとなれるよう英語教育に特に力を入れている国際教養大学。小学校からの英語教育の導入について熱く語るのは、その大学に通う4年生の平良優磨さんだ。国際教養大学は秋田空港の近くにある国公立大学。この大学では授業はすべて英語で行われる。どんなに英語が堪能な学生でも最初の年は英語100%の環境に苦勞するそう。もっと早くから英語をきちんと勉強しておけばと後悔する学生も数多くいるだろう。

しかし、平良氏はこう語った。「そもそも英語学習は全体に強制する必要はない。やりたい人が積極的にやっていけばいいのではないか。」

英語教育を強制しても、それで英語力がアップするとは限らない。最低限の語学力は当然必要だが、それよりもプログラミングなどの技術を身につけたほうがいい。

意外な答えだったが、平良氏は小学校からの英語教育を導入するかしないかということよりももっと重要な問題があると主張した。それはまず、英語教育の場において英語に真剣に取り組む生徒を冷かすような空気の問題を解消することだ。

「日本では英語の授業で英語を真面目に話すとバカにされるケースが多い」こうした空気や重圧が、本気で英語学習に取り組みたいという学生の心を折ることになってしまう。平良氏は英語の学習に妨げとなるこの空気の問題を解決すべきだと主張していた。さらに、平良氏は人前で話すことが恥ずかしいと感じる学生の数を減らすことの必要性も述べた。

「日本人は完璧な英語を話そうとする傾向があるが、スピーキングに関してはとにかく相手とコミュニケーションをとることを意識したほうがいい。」

日本人はその生真面目な性格から文法のミスなくスピーキングをしようとする人が多い。そのため、自分のスピーキングには文法的におかしいところがあるのではと人前で英語を話すことにためらいを感じる人も多い。しかし、平良氏は、間違ってもいいからとにかく話そうとすることがコミュニケーションにおいて大事であり、そのことをもっと多くの学生が知るべきだと主張している。